

[今回のフィールドワーカー]



宮地 歌織

Miyachi Kaori
(国際健康開発研究科 助教)

1972年福岡県みやま市生まれ。1997年筑波大学国際関係学類卒業。東京都立大学修士課程・博士課程、英国サセックス大学大学院(開発人類学)などを経て、国際NGO「家族計画国際協力財団(ジョイセフ)」にて海外プロジェクト担当。2009年より現職。

世界には多様な文化や考え方があり、そんな異文化の人々の暮らしの中に飛び込み、人と関わり合いながら、未知の世界を調査・研究しているフィールドワーカーたち。今回は、世界各地の途上国で、女性の健康面からアプローチを続けている、宮地歌織先生のお話です。

第2回 リプロダクティブ・ヘルス／ライツ

ケニアの農村の女の子の話

私は来年で小学校に入る。もう少し大きくなると、女の子も男の子も「オトナになるための手術」を受けるの。それをやったら、「おねえちゃん」になれるってカンジ。お父さんは「女の子の手術はしなくてもいい」「って言っている。でもおばあちゃんは「やった方がいい」、お母さんも「絶対やるべき」と言っている。痛いけど、その痛みをがまんしないとオトナになれないって。

お兄ちゃんは今年、お父さんと一緒に病院に行って「オトナになるための手術」をし

た。「割礼」というの。お兄ちゃんは病院で泣かなかったって、痛くない注射をしたから。でも手術が終わって、別の小屋で一人になったら泣いていたって。この手術を受けたら、家にはすぐに帰れない。別のところで何日か過ごさなくちゃいけない。でも家に帰ったら「こちそうが食べられるの。お兄ちゃんは、一人ぼっちになったのは初めてだから、怖くなったのかな。私もいつか、この手術を受ける。それをがまんしたらオトナになれる。はやく「おねえちゃん」になりたいな。

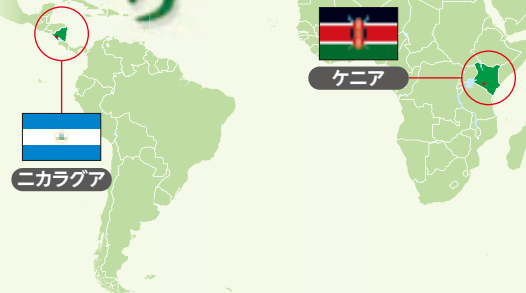


割礼を終え、カンガ(布)にくるまって休んでいるグシイの女の子たち(10才前後)。



西ケニアにあるグシイの人々が暮らす地域。赤道直下だが、高地なので涼しい。自給自足の生活で、畑では主にモロコシなどの穀物を育てている。首都ナイロビでは都市化が進んでいるものの、地方ではのどかな風景が広がっている。

現場に飛び出せ！ 躍動する フィールドワーカーたち





宮地先生がお世話になった
家族のおばあさんとお孫さん。

伝統文化、 「割礼」へのとまどい

人類学では、人々に寄り添う視線でその社会を見るために、現地に住み込んでフィールドワークを行います。私が社会(文化)人類学の大学院生として西ケニアのキシイという地域に住むグシイという人々の中でフィールドワークをしていた頃に、この割礼^{カレ}についても調査をしました。この地域では、割礼は子どもから大人になるための通過儀礼として行われており、成人男性ではほぼ全員、そして女性だと九割以上が受けています。割礼に関しては、宗教や文化ごとに様々な存在理由が提示されていますが、ここでは「伝統」として強く認識されていました。おそらく一生をこの村で過ごす女の子たちにとって、割礼を受けないという選択は考えられず、冒頭の話のように、むしろその日が来ることを待ち望んでいる姿が伺えます。そして、近年では衛生面への考慮という点から、看護師が使い捨てのメスを使うなど近代的な方法が取り入れられていました。(注)

さて「私」という「日本人」がケニアや他の文化を見ると、さまざまな慣習や考え方の違いに驚き、戸惑いを感じたりします。この割礼もまさにそうでした。世界的に見てみると、女性の場合はFGM(Female Genital Mutilation: 女性性器器切除)とも呼ばれ、多くの国際機関や保健機関、先進国の国々などから非難されています。

しかしながら、新聞などのマスメディアが報じていても、外部からの反対活動が行われても、その声は村人の耳を素通りするだけで、心には届かない様子が見受けられました。

女性の健康を大事にする、 というアプローチ

文化として必要とされている女子割礼も、身体的には悪影響であることは間違いありません。また、女性は出産という身体の特長があるので、男性とは別の側面で健康問題を考える必要があります。この地域では割礼以外にも、妊娠時の栄養不足、安全でない出産、望まない妊娠、家庭内暴力など、さまざまな健康上の問題がありました。後から思えば、村人にとっては、ある特定の文化を非難されるよりも、「女性の健康を大事にしよう」という包括的なメッセージであれば、より届きやすかったかもしれません。

このように性や生殖に関する健康問題にアプローチする際には、「リプロダクティブヘルス/ライツ」(Reproductive Health/Rights ※以下、「RH/R」という概念が欠かせません。日本ではまだ、なじみの薄い言葉ですが、直訳すると「性と生殖に関する権利」のこと、たとえば家族計画や母子保健、HIV/AIDSを含む性感染症などに関して、情報やサービスを誰でも受けることができ、安全で安心して健康に暮らすことができる、という包括的な権利を意味します。

私はもともと「RH/R」という言葉は知っていたのですが、ケニアでのフィールド経験から、まさに「これだ!」と思いました。途上国でも、先進国でも、女性が自分自身の身体を大事にし、安全に産したり、望まない妊娠を防げたりすることは、とても素晴らしいことだと思いませんか?

そして、その後も途上国のフィールドで活動したいと思い、RH/R分野の国際協力の現場へと足を踏み入れて行きました。



孫が割礼を終えたことを喜び、自分たちも誇らしい気持ちで踊る祖母たち。



学校から帰ったら、家の畑のお手伝いをするのが子どもたちの日課だ。



グシイの人々は割礼による精神的、肉体的痛みを乗り越えることが、女性としてステップアップすることだと考えている。写真は孫の面倒を見る祖母。

ほとんどがキリスト教徒のグシイの人々にとってクリスマスは大事なイベント。パーティーで得意げにダンスを披露している女の子たち。すでに割礼を受けている年頃。

NICARAGUA

「思春期保健」 ニカラグアの新たな挑戦、



さて、RH/Rにはさまざまな分野がありますが、その中で近年重要視されているのは「思春期保健」という若者をターゲットにした活動です。日本でも、途上国でもそうですが、結婚しているカップルや出産経験のある女性たちと比較すると、若者は性に関する情報やサービスは得にくいという状況があります。その一例として、中米のニカラグアを見てみましょう。

2006年、首都のマナグアからそう遠くない中規模の町で、妊娠中の十六歳の女の子に出会いました。彼女は他のラテンの若者同様、踊るのが大好きです。週末にはよく踊りに出かけています。でも他の子と違ったのは、八月の大きなお腹でした。この町では彼女だけではなく、他の若者や女性にとっても、意図しない、望まない妊娠が多く、シングルマザーも多いことに驚きました。しかし逆をいえば、シングルマザーが実家で子育てをする風景は、どこにでも見られる、普通の光景ともなっていました。



ニカラグアの思春期保健のプロジェクトで、若者に性に対する現状について聞き取り調査をしているところ。

カトリックや政治の影響もあり、この国では人工妊娠中絶が法律で禁止されています。10代前半は身体も未発達で、妊娠・出産による悪影響が懸念されますが、妊産婦の生命に関わるケースでも、また自分が意図しない妊娠（たとえば暴力を受けた場合）でも中絶ができません。しかし、教会でも、学校でも、若者に対する性教育はなく、避妊具も手に入れることが難しい状況でした。

そこで保健省が中心となり、思春期の若者が利用しやすく、質の良いRH/Rのサービスが提供されることを目的としたプロジェクトが始まりました。私もプロジェクトに入り、まずは「大人」（保健施設のスタッフや地域のリーダー的な存在の人）に対して若者の状況を知ってもらうこと、そして「若者」に



まちの薬局で、若者が購入している避妊具についても調べた。



現地のスタッフや若者に性教育教材の説明をする宮地先生。

対しては「思春期保健プロモーター（推進者）」として養成したり、若者同士が教えあうピア（仲間）・エデュケーションを取り入れたり、そしてさらには、大人と若者がアイデアを寄せながら協同で啓発活動（イベント企画）をやるサポートをしてきました。

当初は「若者ができるわけではない」と眉をひそめていた保健センターのスタッフも、若者たちの発想力や行動力、そして自分たちの友達を助けたいという情熱に押され、だんだん協力的になっていきました。そしてプロジェクトの終了時には、若者をサポートする体制が整い、若者自身もプロモーターとして活躍するなど、既存の人材や枠組みの中で自分たちの活動を展開していけるところまでたどり着く、ことができました。

世界各地での取り組み

今回、ケニアやニカラグアの事例を挙げましたが、RH/Rをとりまくものの幅広さ、そして政治や文化、宗教との関連での難しさが垣間見えたかと思えます。その難しさに対しては、別の国や地域で得た経験が役に立つ場合が多々あります。私の場合、一カ所にとどまってフィールドワークを続けるというスタイルではありませんが、アフリカ、アジア、中南米でのフィールド経験を踏まえながら、RH/Rという切り口で今後も調査や活動を続けていきたいと思っています。



国際健康開発研究科の大学院生たちとのバングラデシュ訪問。NGOによる農村地域での子どもの教育活動現場を訪問。

（注：P.9）より詳しく女子割礼について知りたい方は次の文献などを参照ください。
「ケニアの社会における「女子割礼」をめぐる現代的諸相」
宮地歌織「社会人類学年報第30号」弘文堂 2002年
『裸のアマンソマリ人少女の物語』口述／アマン
（ワシントン・ポスト）ジャズボイ著 早川書房 1995年